

## 第四胃変位多発農場における総合的検診事例

第4胃変位多発農場で代謝プロファイルテストに基づく飼養管理指導および乳房炎防除対策を実施し、第4胃変位手術例が減少し乳質も良くなった事例を報告します。

### 対象農場の概要

経産牛頭数	70頭
飼養形態	スタンション（昼間パドックにて運動有り）
飼料作物総面積	55ha（グラスサイレージ主体、コーンサイレージ無し）
労働力	5名（家族労働）
経産一頭当たり乳量	11,500kg
飼料給与	TMR+自動給餌機（濃厚飼料）

### 検診以前の問題点

- 乳量は増加したが、それにとまって繁殖成績が悪化
- 繁殖成績の悪化によって乳量が低下
- 過肥牛が増え第四胃変位等、周産期病が増加
- 乳質についても、乳量に連動するように体細胞が高く推移

### 検診以前の第4胃変位手術頭数（ ）内は経産牛70頭に対する発生率

2003年	6頭（8.6%）
2004年	14頭（20%）

### 検診実施内容

第1回牛群検診（代謝プロファイルテスト）	2004年11月
搾乳立会	2004年12月
飼料設計	2004年12月～現在
繁殖検診	2005年2月～現在
第2回牛群検診	2005年11月

### 第1回牛群検診での飼料給与と問題点

乾乳時での泌乳用TMR長期給与で乳熱が多発。また、産後から泌乳ピークまでの濃厚飼料の増給スピードが速いこと、更に自動給餌機での一回当りの濃厚飼料給与量が多い（最大1回5.5kg）ことから、軟便となっており、アシドーシス傾向が血液結果でも確認された。

# 飼料給与上の問題点

ステージ	乾乳	乾乳	乾乳	乾乳	泌乳	泌乳	泌乳	泌乳
日数	～21	～14	～7	～分娩	1～7	15～21	29～49	110～
泌乳TMR	13	13	13	13	22.47	31.73	31.98	37.38
GS1	10.4	10.36	10.36	10.36				
GS2								
乾草1番	2	2	2	2				
米ぬか	0.5	0.5	0.5	0.5				
ビートパルプ						1	3	1
乳配18					2	4	8	5
育成配合	0.5	0.5	0.5	0.5				

泌乳用TMRは25kg設定  
自動給餌機で乳配、ビートパルプを1日2回

以上から乾乳時の泌乳用TMR給餌を中止し、泌乳期では、TMRのベースを上げ（25→30kg）、自動給餌機での1回当り濃厚飼料給与量を減らした。

## 現在の飼料給与（TMR分）

飼料名		数量	乾乳前期	乾乳後期	ベース20kg
1	グラス1番(DM50.0%CP11.7%)		23	15	15
2	グラス2番(DM45.4%CP13.8%)				7.5
3	乳配(マッシュ)18				6.5
4	低ペロコーン				2
5	ルーサンキューブ				2
6	大豆フレーク				1
7	リンカル				0.12
8	塩				0.04
9	ビタミン剤		0.03	0.03	0.01
10	乳配18		2.5	4	1
11	バイパス蛋白			0.1	
合計			25.53	19.03	25.17

63頭	65頭	67頭	69頭
945	975	1005	1035
472.5	487.5	502.5	517.5
409.5	422.5	435.5	448.5
125	130	134	138
125	130	134	138
61	65	67	69
7.56	7.8	8.04	8.28
2.92	3.0	3.08	3.16
0.63	0.65	0.67	0.69
2192	2221	2258	2298

No1～9までがTMR  
TMR中 粗飼料60%

# 現在の飼料給与

日付 2006/2/6

設定 泌乳日数: 7~120

農家名: \_\_\_\_\_ 体重: 650kg 乳量: 30~60kg

設計者: \_\_\_\_\_ BCS: 3 乳脂肪: 4.00%

産次数: 2 乳蛋白: 3.20%

	飼料名	単価	産後~7日	~14日	~21日	~28日	50kg	45kg	40kg	35kg	ペース30kg
1	TMR		飽食	飽食	飽食	飽食	飽食	飽食	飽食	飽食	34.87
2	乳配18		1	1	1.5	2.5	4	4	3	1.5	1
3	ビートパルプ			1	1.5	2	2	2	2	1	
4	バイパス蛋白		0.5	0.5	0.5	0.5	0.5				
5	リンカル		0.1	0.1	0.1	0.1					
	合計										

コメント

TMRには、塩、リンカル、ビタミンが含まれているので注意してください。

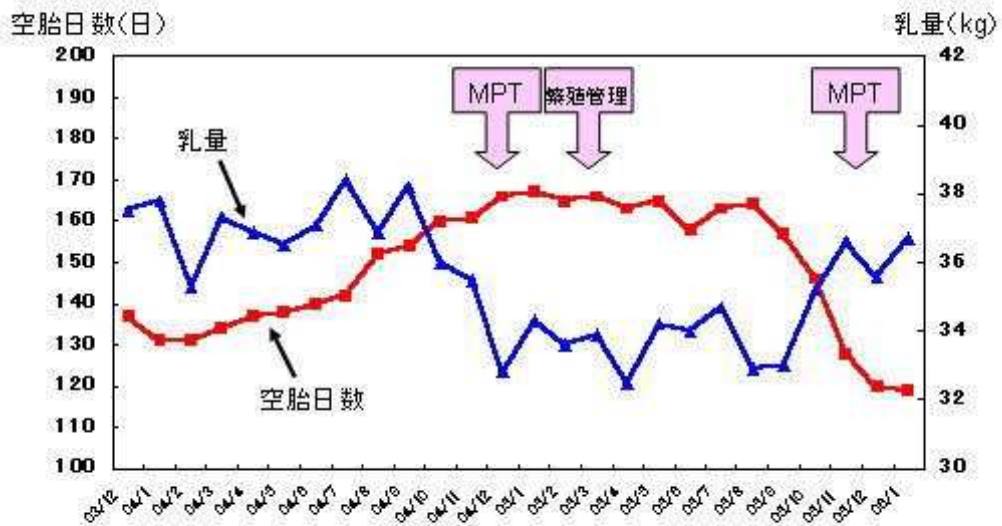
産後には、リンカルを100g余計に与えてください。

産後の増給法で、便の軟らかさが変わると思いますが、グラスのタンパクが低いのでピークまでバイパス蛋白を増やしました。

TMRの濃度が若干薄いのですが、高泌乳牛でちょうど良いと思いますから弊舎にしないで下さい。

## 第1回牛群検診（MPT）後の繁殖成績と乳量の推移

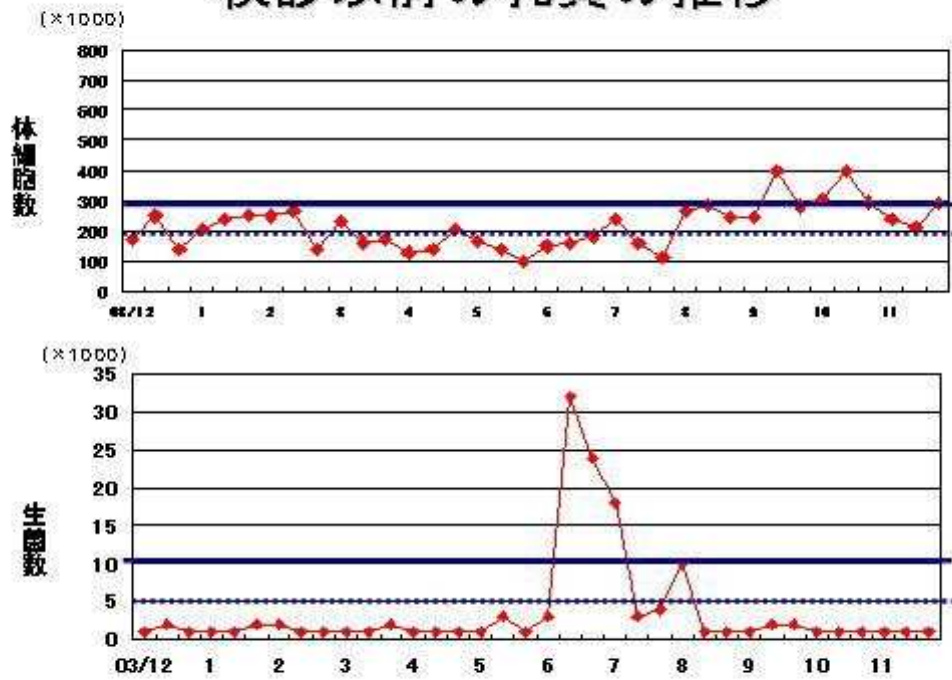
### 繁殖と乳量の推移



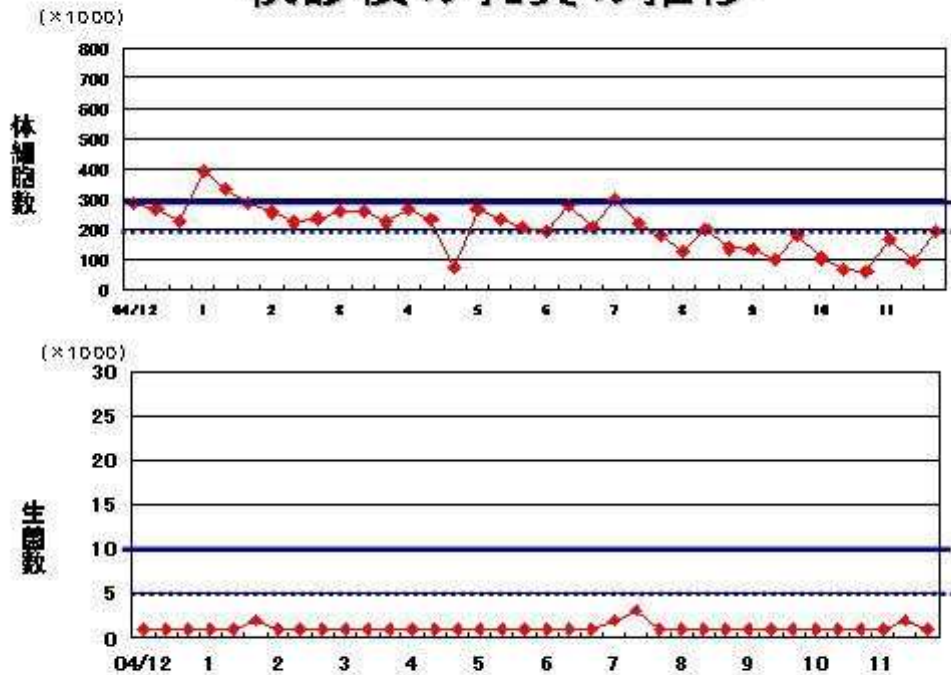
## 四変手術頭数の推移

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
2003		1			2			1				2	6
2004	1	1	3	2				4	1		1	1	14
2005	1	2					1	1					5

## 検診以前の乳質の推移



## 検診後の乳質の推移



以上のように一時期、繁殖成績の悪化にともなって乳量が低下しましたが、飼養管理を改善することによって再度、乳量、乳質も回復してきました。第四胃変位手術も2005年は約1/3に減少しています。この農場で行ったのは、周産期から泌乳ピークに的を絞って飼料設計を行ったこと、更にライナーの離脱のタイミングを適性にしたことです。

今回の結果から、乾乳後期から泌乳ピークに向けての管理がいかに重要で、デリケートなものだということを考える機会にして頂けたら幸いです。

泌乳、乾乳といった一連の流れの中で、リズムを作り出すことは非常に重要なことです。しかし、その中でも周産期を無難に乗り切ることが、まず第一歩になることを肝に銘じたいものです。